



世界的大量解雇の時代に思うこと

遠野はるひ / とおの・はるひ
フィリピンヨタ労組を支援する会

2008年11月7日、期間従業員を3000人削減するというトヨタの発表。トヨタショックを、私はマニラで知った。この日は、奇しくも、政治的殺人の危機に襲われたフィリピンヨタ労組のエド委員長へのインタビューを予定していた。

トヨタショックをスタートの合図にして、大手の自動車・電機各社は非正規雇用の削減計画を次々と発表した。「派遣切りトヨタと一緒にすれば怖くない」である。業界団体は、製造業の非正規雇用労働者40万人が削減されるという予測をだしている。製造業以外の産業で働く非正規雇用労働者や正規労働者の解雇を加えると、失業者は100万人を越えるだろうという推計もある。

訪比の前に、30年近く定点観測をしている台湾の高雄輸出加工区に立ち寄った。そこではエージェンツに手数料を支払い2年契約で出稼ぎに来ていたフィリピンの女性労働者が、突然、大量解雇されていた。女性たちは政府所有の寄宿舎も追い出され、強制的に帰国

させられる。金融危機のツケを最初に支払うのは、一番弱い労働者だ。ILO(国際労働機関)は、今年4000万人の労働者が職を失い、世界の失業者数は2億3000万人になると予想している。

世論の関心をバックにしたマスコミによる連日の報道もあり、派遣法や雇用保険システムなどの改正、ワークシェアリングの導入が論議されているが、私は、問題の解決には、同一価値労働・同一賃金の実現が最も重要だと思っている。身分の差を理由にした差別賃金が、正規・非正規雇用に労働者を分断させてきたからだ。

同時に、日本の非正規雇用労働者やフィリピン、中国の労働者が「底辺に向かつての競争」をさせられないためには、生活賃金の要求と結社の自由・団結権を保障する人権問題に取り組み国際連帯が不可欠だ。といっても、現実の国際連帯運動は容易なものではない。日本ネグロス・キャンペーン委員会から続く、国境を越えた協同作業の経験の蓄積を持つAPLAに、学んでいきたいと思っている。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

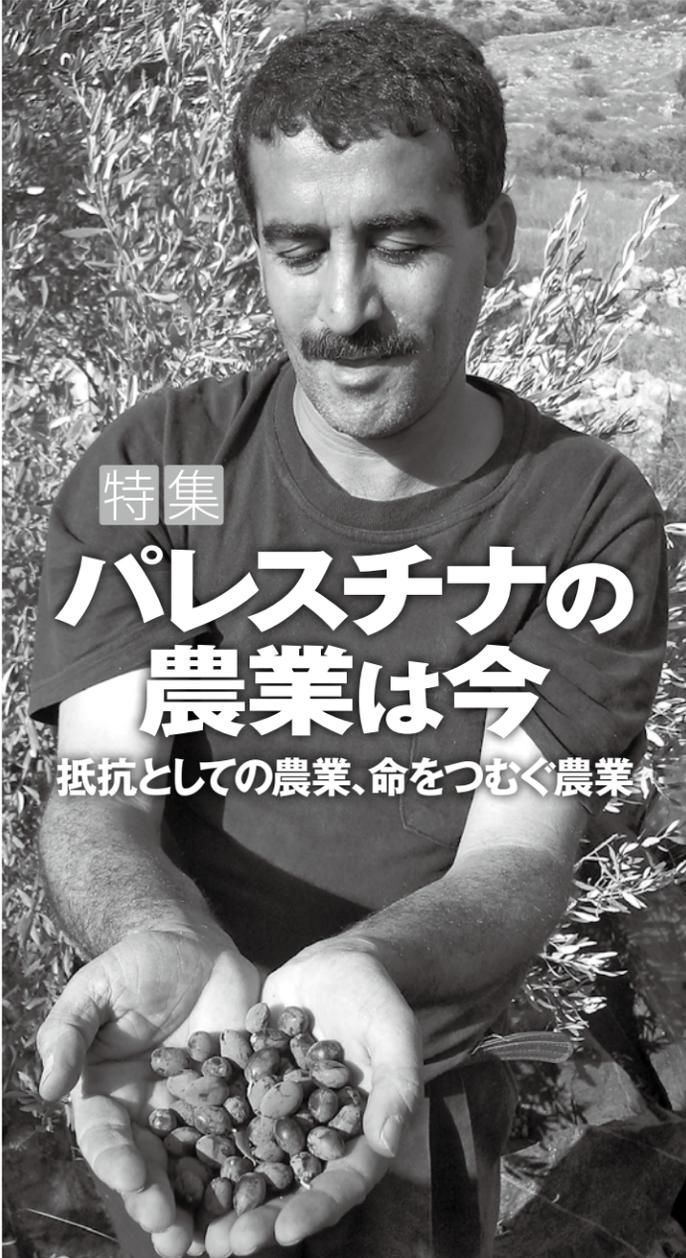
CONTENTS ■ HALINA 04 2009.05.01

- 02 Relay Essay **ポコポコ④** 世界的大量解雇の時代に思うこと◎遠野はるひ
- 03 **【特集】パレスチナの農業は今—抵抗としての農業、命をつむぐ農業**
パレスチナ—占領下では農業もまた占領されている◎近藤康男
食からみるベツレヘム周辺の人びとの豊かな暮らしと現実◎藤屋リカ
ドキュメンタリー映画『オリーブの木がある限り』◎大野和興
- 08 Topics
ネグロス農民、北部ルソンを訪ねる◎吉澤真満子
ホームレスの叫び◎奥田知志
- 10 堀田正彦のアジア食い倒れ④
マレーシアの“鯨丸ごと一匹ゴロン”とカレー◎堀田正彦
- 10 むらさ歩く④ 幻のサツマイモがよみがえる ちちぶ太白イモと老百姓◎大野和興
- 11 あっちこち雑学手帖④ 昔話、所変われば◎松田麻衣子
- 11 じゃらん・じゃらんアジア④ 養殖池の主・ミルクフィッシュ◎村井吉敬
- 12 撮っておきアジア④ 熊本県水俣市袋地区◎吉永紘史
- 13 APLA生活④ グランドの塩◎山下万里子
- 14 Voice from APLA partners
【韓国より】韓国ともパートナーシップを築いています。(ドッレ生協とAPNet)
【パレスチナより】オリーブオイル出荷団体 UAWCのご紹介
- 15 事務局便り

表紙のことば

パレスチナの女性の伝統的な衣装は、刺繍が全面に施されたドレスです。クロスステッチで描かれた模様や用いる色は、地方によって特徴があります。黒地に赤い糸での刺繍が、最も伝統的な色使いです。刺繍の技術は母から娘へと引き継がれています。刺繍の盛んなパレスチナ南部の村落では、今でも女性が結婚する時に総刺繍の伝統的なドレスを新調して、持っていくことが多いです。

この写真の刺繍はドレスのスカートの部分です。「海の波」と呼ばれる伝統模様です。息子を大学に行かせたい母親から、お金を工面したいと知人を通して相談され、このドレスを買い取りました。細かく丁寧に施された刺繍は、布そのものを丈夫にし、20年以上経っても美しいその刺繍は今でも目を楽ませてくれています。(藤屋リカ)



イスラエルのガザ侵攻は人を殺し、建物を破壊しただけではない。ガザの農地と農業をズタズタにした。そこに生きる人びとの命の根っこが農地と農業にあることを知っているからだ。ガザだけではない。パレスチナの基盤は農業であり、多くの人が土に寄り添って、オリーブの木に誇りを持って生きている。その農地と農業は今どうなっているか。パレスチナの人びとの土にかける思いと合わせ、紹介する。



パレスチナ

— 占領下では農業もまた占領されている

近藤康男 / こんどう・やすお
APLA 監事、互恵のためのアジア民衆基金事務局

08年12月から始まったパレスチナ・ガザ攻撃とそれに対するハマスの反撃は、現在(09年3月23日)互いの一方的停戦により表向き平穏な状況が見られる。しかし、破壊しつつくされたガザの暮らしの復興

壁の内側に身を置いて初めて、そしてほんの少しだけ分かる 真実

04年2月、(株)オルター・トレード・ジャパン(ART)でのパレスチナ産のオリーブオイル取り扱いの可能性を探るために最初の訪問をして以来、彼の地への訪問も既に9回を数えることとなった。オリーブオイルの輸入も年間40トンへと大きく増加したと聞いている。

アッバス議長に米国やイスラエルがある意味で肩入れをするようになり、ヨルダン川西岸の自治区に限って言えば、占領は多少表面的な低強度戦争の様相を帯び、見チェックポイントの数も減り、検問所も外見は洗練度を高めているように見える。移動も以前よりスムーズで、唯一の公共の移動手段である乗り合いタクシースも検問所を越えて運行されるようになってきた。オリーブオイルの取り組みに

関わる生協や団体の交流訪問団は検問所でイスラエル兵と一緒に写真に納まることまで経験している。しかし、初めて壁の内側に身を置き監視・命令される立場となった時に感じた、日々の苛立ち、反発、不安、憎しみにも似た感情と暴力の増幅が、相対する双方を普通の人間でなくしてしまう。という想いは今も変わらない。

表面的な平穏は、時期と場所による例外的な装いでしかなく、日常的な暴力と市民の殺害は当たり前のように行われ、更に国境でのイスラエル側トラックへの積荷の積み替えなど新たな経済的な締め付けも登場してきている。

そして何よりも、まさにオスロ合意を利用しての民生部門の業務の放棄による社会インフラの劣化、壁と専用道路＝軍事・入植者専用によるパレスチナ国土の地理的分断、新たな入植地建設が進められ、独立国家が仮に成立してもまともな国としての姿をとり得なくなるための既成事実が進行している。

占領され、分断・閉鎖・包囲されたパレスチナの農業

一口に言っても、パレスチナの農業は、占領され、分断・閉鎖・包囲され、そしてイスラエル経済に従属させられ、高コスト体質にされ、更にはごみ溜めにされた農業

パレスチナの農業

農地面積	1,488km ²	国土の25.2%、西岸地区農地の内54%がオリーブ畑
灌漑面積	158.2km ²	灌漑比率10.6%、イスラエル入植地では70%
農業/GDP	12.4% (04年)	イスラエルは2% (04年)、67年は30%超
農産物輸出	輸出全体の25%	オリーブ、オリーブオイル、野菜、果実、生花
農業従事者	就業人口の14.4%	農村婦人の32.5%
自給率	穀類35%、野菜91%、鶏肉90%、牛豚肉35%、ミルク61%	
オリーブオイル	6,000～35,000トン生産	農業生産の13%、消費12,000～15,000トン

占領下の農業

土地収用	67年イスラエルが所有権登録を凍結⇒所有者不在地として没収
入植	00～06年だけで7,700ha接収
軍・入植者の暴力	00～07年で農民66名殺害 00～07年200万本以上の樹木伐採
02年からの壁の建設	完成時730km⇒西岸の40%を喪失、10%の地域=97の村が孤立、8の村が壁と国境の間に孤立
専用道路	4,177km⇒国土・農地・交通を分断
水資源支配	ヨルダン川の65%、表流水90%がイスラエル管理下⇒水の利用率一人当たりで入植者の4分の1
灌漑施設破壊状況	1,362の貯水池・水槽、97万9,000mの水道、3,380ha分の灌漑水路

(2007年6月)パレスチナ農業復興委員会 (PARC) 作成資料から)
※ PARC: 1983年に設立された農業復興NGO。主な活動内容としては、農村の女性支援、農民の組織化、オリーブオイルその他の農畜産物の生産・販売を行っている。



検問所は人の行きかきも物流も阻んでしまう。



肥沃な土地、水資源を奪うアパルトヘイト壁。

となっている。

- 水・農地などインフラの没収・破壊・分断
- 農作業、特に収穫時の否応無し制限と妨害
- その結果としての農作物の放置と品質劣化
- 情勢の不安定化と移動制限による市場の喪失
- 農業資材の購入、農産物の販売面でのイスラエル市場への依存・従属
- 入植地からの未処理廃棄物・汚水による環境汚染

しかし、彼等の現実には黙々と耐えて営むことだけでは済まされないところにある。自分の農地に

辿り着くためには、壁や金網を通るためにイスラエル兵と、そして、オリーブを収穫するためには入植者の暴力と戦わなければならないこともある。職をイスラエルや入植地に求めざるを得ないことも現実である。

90年の湾岸戦争以降、湾岸諸国での出稼ぎ先を失い、村に戻らざるを得ないパレスチナ人が増える一方、インティファダ(民衆蜂起)以降農業インフラが破壊され、イスラエル内の就業機会を失い、そして販売先としてのイスラエル市場を失う状況が続いている。敵対関係にありながら、パレスチナの産品の最大の市場は隣国のイスラ

エルであり、イスラエルにとってもパレスチナは重要な市場である。しかし、不幸にもその関係は一方的な支配と従属の関係としてある。67年にはGDPに占める農業の割合が30%超であったのが04年には12%台まで減少している理由は、一般に見られる産業の高度化だけではなく、農業が破壊されたことにもあるはずである。

日々打ちのめされるだけでなく、将来を計画すること自体が不可能

で、シジフォス神話のような営みを受け入れざるを得ないのがパレスチナである。そして自治政府自身の有効で持続的な農業政策も実施されていない現状である。

しかし、パレスチナのNGO、農民は抵抗運動や独立国家樹立の戦いを続けながら、自ら農業インフラの建設、加工・流通、市場開拓などの取り組みを進めている。2月にはアーモンドの花が咲き誇り、日本の桜のような美しさを愛

でることができる。11月は家族総出でオリーブの収穫に集い、伝統の料理を食べ、皆で憩う。オリーブに象徴されるパレスチナの農業は歴史、文化の源でもある。アイデンティティを守るためには戦うしかなく、戦いの持続のためにはアイデンティティが必要とされている。

国連特別報告がいみじくも言っている。「国際的な制裁措置が占領

者でなく非占領者に対して課せられたのはこれが初めてである」

〔注〕オスロ合意
1993年9月にイスラエルとパレスチナ解放機構(PLO)の間で同意された一連の協定。イスラエルがPLOをパレスチナの代表交渉当事者と認め、イスラエルが占領する地域に5年間の暫定自治期間を設け、その間に最終的な返還条件を決め、両者の歴史的和解を達成する内容が合意された。しかし、その後オスロ合意の調印を行ったシモン・ペレスとイスラエルにおける政権交代、イスラエルの抑圧的な占領政策の加速により、パレスチナ側の不満が募り、2000年に第一次インティファダが起り、オスロ和平プロセスは崩壊した。

〔注〕シジフォス神話
約束を破ったシジフォスが罰として山頂まで大きな石を上げるよう命じられるが、石の重みで底まで転がり落ち、この苦行が永遠に繰り返されるという果てしない徒勞の寓。

食からみる

ベツレヘム周辺の人びとの豊かな暮らしと現実

藤屋リカ / ふじゃ・りか

日本国際ボランティアセンター パレスチナ事業担当

パレスチナ・ヨルダン川西岸地区のほぼ中央、標高800mの丘陵地帯に3000年以上前から人びとの営みがある街、ベツレヘムはあります。ベツレヘムを中心に、まわりにはいくつもの町や村があり、周辺の丘陵地にはオリーブ畑が広がっています。ムスリムもク

リスチャンも住むこの街は、モスクからのお祈りの声アザーンと教会の鐘の音がハーモニーを奏でます。

村々の特産品

ベツレヘム周辺半径数kmの小さな地域の中には、各々の村に

特産の野菜や果物があります。年間降水量は350mm程度、川もないので自給自足は難しく、また、古くから通商地点として栄えた土地柄が影響しているのでしょうか、人びとは旬の時期に「この村のこれ!」と指定して買い求め、生産する人びとはそれを誇りにしています。

ベツレヘムの北に位置するベイトジャラ。周辺で最も高地にあり、丘陵地で栽培されたアプリコットが名産です。アラブには「明日はアプリコット」という格言があり、収穫時期が短く傷みやすいアプリコットを例えて、明日は何が起こ

るかわからない」という意味で使います。アプリコットはジャムにすることが多く、種の中心部の杏仁も一緒に煮込みます。女性たちは総出で手間をかけて作り上げていきます。

ベイトジャラの北西に位置するバティールはナスの名産地。ナスはアラビア語でバティンジャンと音も近いです。また有数のオリーブ産地でもあります。ナスは、細かく刻んだ胡桃、青唐辛子やニンニクをはさんで、オリーブオイルに漬けて込んで保存します。ベイトジャラの南西はハダルです。ハダルはアラビア語で緑を意味します。

文字通り、緑の美しい村でブドウ畑が広がっています。ブドウはそのまま食べるだけでなく、果汁を煮詰めて蜜のようにします。これはデブスと呼ばれ、保存食であると同時に健康食です。デブスにゴマのペーストを混ぜ、パンに付けて食べます。鉄分が豊富で、妊婦や成長期の子ども、病気の回復時

期には欠かせません。ベツレヘムから南東に下るとベイトサフルで、羊飼いの野とも呼ばれる場所です。特産はファークース。薄黄緑色で表面に産毛がある、キュウリに似た野菜です。これは塩水を使った自然発酵のピクルスにして保存します。水に新鮮な卵を殻ごと入れて卵が浮いてく

るまで塩を加えて漬け汁の濃度を決めます。このような知恵は、母から娘に伝えられています。

イスラエルの占領と人びとの生活

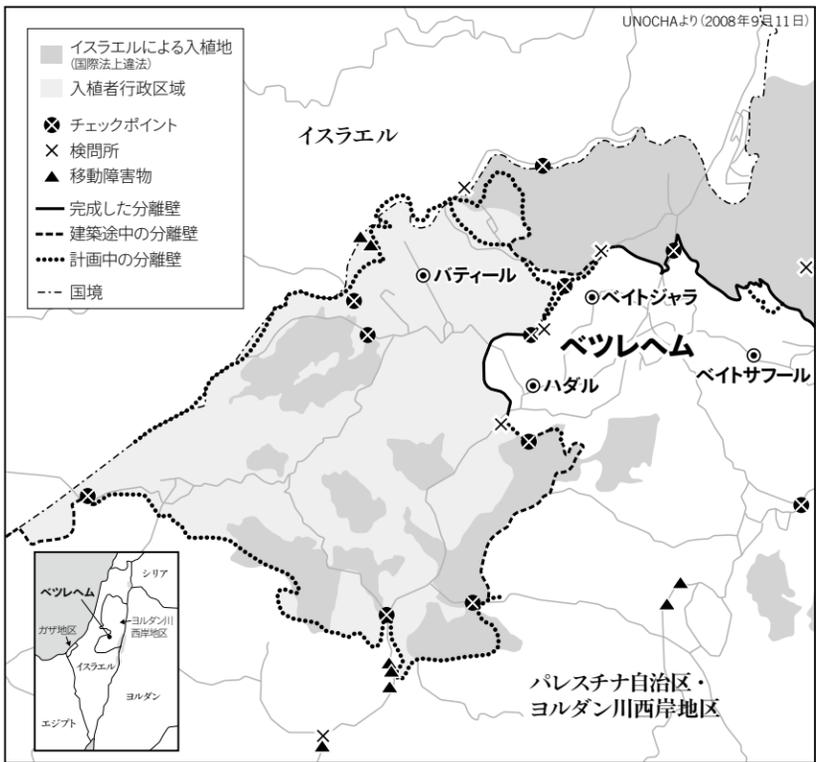
しかし、人びとの生活は構造的な問題

により不当かつ困難な中にあります。1967年の第3次中東戦争以降イスラエルの占領下にあり、国際法上占領地への入植は禁じられているにも関わらず、イスラエルによる入植地の建設は拡大し続けました。パレスチナの人びとは土地を奪われ、入植地とイスラエル側を結ぶ専用道路によって生活は分断されました。2002年からイスラエルが自国の安全を名目に一方的に建設を進めている分離壁は、入植地をイスラエル側に取り込む形で建築が進み、人びとは更に土地を失い、移動の自由を奪われました。村から村への移動も、検問所や移動障害物(フェンス、岩などで制限されています。特に深刻なのは、バティールです。エルサレムに隣接する北部は、分離壁

の建設によって土地が奪われ、自分の農地に行くのにイスラエルの許可が必要になることさえあります。ベツレヘムに向かう主要道路は封鎖され、遠回りしなければなりません。以前は15分で行けたところが、30分以上かかることもあります。封鎖は農産物の運搬はもちろんです。特に急患で病院に行くときには大きな問題となります。

存在することが抵抗する

このような状況の中でも、伝統に誇りを持ち、子どもへの教育こそが最も大切なことと、人びとは淡々と生活を続けています。「存在することが抵抗すること」とよく聞きます。パレスチナの格言に「今日は蜂蜜(アサル)、明日は玉ね



ぎ(ハサル)があります。蜂蜜の甘さは幸福、玉ねぎの苦さは苦難の象徴で、良いことは続かない、という意味です。困難な生活を強いられる中、ある女性が「今日は蜂蜜、明日も蜂蜜」と冗談を言っ

て、笑い飛ばしていたのは印象的でした。土地を愛し、オリーブの木が切られれば植え続け、季節が巡ってくれば制限の中でも自慢の特産品を作ります。女性たちはおしゃべりをしながら保存食に加工し、その知恵は若い世代に伝えられています。

ドキュメンタリー映画『オリーブの木がある限り』

大野和興 / おおの・かずおき
農業ジャーナリスト、本誌編集長



収穫作業後、畑で憩う家族。(『オリーブの木がある限り』より)

パレスチナは農民の国
ATJの役員だった近藤康男さんの世話になり、APLA/あぶらの吉澤さん、和光大学のロバート・リケツトさんら多くの人の厄

介をかねながら日本語版(原稿はフランス語)を作り、私が代表をしている国際有機農業映画祭の第2回映画祭で上映した。2008年11月16日の上映当日は、ATJと民衆交易仲間のグリーンコープなど生協・消費者グループが招聘して

「オリーブの木がある限り」というのだと聞いて、とても心が動いた。テレビや新聞などで接するパ

公PARCのサリーム・アブー・

ガザレさんとパレスチナ農業開発委員会(UAWC)のカレド・ヒドゥミさんが会場に足を運び、30分にわたり参加者との対話をもつてくれた。

冒頭、ナレーションが語りかけ

「パレスチナといえば、石を投げる子ども、自爆するテロリスト、イスラエル軍と戦う青年、ステレオタイプのパレスチナ。もちろんそれも事実だが、その背後にもうひとつの現実がある」

「パレスチナの人びとの多くが農民であるということ、誰が知っているだろう」

映像は壁を、検問所を映し、カメラは次第にパレスチナの内部に踏み込む。乾いた土地に広がるオリーブ園、一家総出で収穫作業に従事する村人、よちよち歩きの幼児も一人前に畑でがんばっている。突如ニュース映像が入る。イスラエルの兵士が重機を持ち込み、オリーブの木を引き抜いたり、切り倒したりしている。一人の農民が猛烈な抗議を行うが、たちまち兵士たちに押さえ込まれ、腹をけ

られ、連行される。

100万本が引き抜かれた

映画祭会場。サリームさんが話した。

「パレスチナには1000万本のオリーブの木がありました。この7年間に100万本がイスラエルによって引き抜かれたのです。カレドさんが語った。

「オリーブの木を育てること、そこからオリーブオイルを絞り、製品に仕上げることは、私たちにとって戦いそのものなのです。土地の権利、水の権利はそのまま人間が生きていくための権利、生存権そのものです」。

パレスチナはオリーブの原産地のひとつとサリームさんは指摘する。コーランでも神聖な木とされ、オリーブと人との付き合いは3000年以上に及ぶ。

「そのオリーブの木が引き抜かれるということは、私たちの文化や歴史、宗教を根こそぎにされるということなのです。同時にそこで生活の糧を得ている農民の未来を奪ってしまいます。だから私たちは引き抜かれても引き抜かれても植え続けます」。



分離壁に描かれた落書き。

ネグロス農民、北部ルソンを訪ねる

吉澤真満子／よしざわまみこ
APLA事務局長

2

009年1月25〜29日、青年5人を含め、ネグロス農民13

人がフィリピン・北部ルソンを訪れた。今回の交流訪問の目的は、価値観の転換。ネグロス島では、経済、農業インフラ、生活文化、そして人びとのメンタリティにまで、スペイン植民地時代から続く砂糖キビ農園のシステムが浸透している。砂糖キビは年一回の収穫だから収入も年一回。植え付け、収穫などの畑仕事がない間は借金をし、賭け事やトランプをして遊ぶ。農園労働者から農民になる。そこでぶつかった大きな壁は、こうした人びとのメンタリティやライフスタイルだった。

北部ルソンの農民

フィリピンは約7000の島からなる国だ。地域の文化は多種多様。北部ルソンは、先住民族が多く住む地域。米、とうもろこし、野菜、果物の栽培を軸に人びとは農業をベースに生計を立てている。フィリピン社会の中でしばしば先住民族たちは原始的であると



苗木の作り方を真剣に聞くネグロスの農民たち。

差別を受けてきた。しかし、彼らの生活を覗いてみると、自然と人の調和先祖から伝わる知恵を大事にしている人びとだと分かる。また、ケチだと言われることもある。しかし意味を変えれば「堅実」ということである。訪問させてもらった米生産者になぜ成功したのかと聞くと、「必要でないものを買わない、買えないものは買うな、の精神だ」と言う。つまり借金はしないということ。そしてよく働くことだとも話した。「農民は80%自給して農民である。40%以上外から買っていたら農民ではない」。農業をしていけば遊んでいる暇はない。ネグロスの農民にとっては耳の痛い話だった。

土地への執着と、愛情

北部ルソンの地は、その豊かな自然ゆえに近代化の波にもまれてきた。70年代半ばから森林伐採、鉱山開発が始まった。今でもこの鉱山開発は進んでおり、今回訪れた地域のひとつもその開発予定地区の中にある。実際に開発が始まれば8村1万8000haが消えてしまう。現在村々ではこの鉱山開発に断固として反対する運動が繰り広げられている。彼らにとって土地は、地域、農業、生活の基盤である。その場所ですでに暮らしをつづっているのだ。この土地への執着、愛情は、ネグロスの農民たちにも、なぜ自分たちが壮絶な土地闘争を行ってきたかを思い出させた。

自分たちの手で築くとは…

「もつと複合農業をやっているかと思っただ」。交流の中でこう発言したネグロスの農民がいた。彼の頭には、支援NGOが示してきた、田んぼ、畑、家畜などがバランスよく備わっているモデル的農場を想像していたようだ。柑橘農家のギルバートさんはこう答えた。「複合とはいかに多種多様な収入源を持つかだ。柑橘にも、種類が豊富にあり収穫時期もずらせる。6種類の

柑橘に加えて、他の果物も栽培している。あとは、自給用の家畜、魚の養殖をし、余ったらそれを売る。北部ルソンにも様々なNGOや機関がやってきて色々な情報を提供する。しかし、それは教科書の中のこと。必要と思ったことは聞き入れるけど、実践者のアドバイス以外はあまり聞かない。情報を取捨選択するのは自分自身だ。これまでたくさんさんの支援がネグロスにあった。しかし、自分たちはその身を吟味してきたか？ 提案されたものを受け入れてきただけで、何をしたいか主体的に考えてきたか？ そんな振り返りの言葉が出てくる。北部ルソンの人たちが、貧しいながらも自分たちの手で築きあげている農業、生活を目の当たりにして、思うことが多くあった。

この旅の最後には、今後ネグロスで何をするか熱心な話し合いが続いた。参加中はおどろきなく見えた青年たちからも発言が出た。「まずは自分たちがモデルとなって成功しないと、周りの農民はついてこないよ！」今回参加した全員が、それぞれ何か心の中に大きなお土産を持って帰ることができたと思う。これからネグロスがどう変わっていくのか、楽しみだ。■

ホームレスの叫び

奥田知志／おくだともし
NPO法人北九州ホームレス支援機構 理事長

「ホームレス」だめさうじやない

「ホームレス」とは誰のことでしょうか。多くの方々は「野宿者」と答えるでしょう。政府も「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」と規定しています。

食料、衣料、医療などあらゆる面で物理的困窮状態に置かれている、これが野宿の現実です。私たちは、これを「ハウスレス状態」と呼んできました。この状況をいかにして解消するかは大きな課題であり、国は公的扶助(生活保護等)でこの部分をしっかり支えねばなりません。一方、私たちは野宿者が抱える問題を「ハウスレス」のみならず「ホームレス」と捉えてきました。「ホーム」とは、家族、友人、知人など、人と人との関係そのものです。「ホームレス」は「関係の困窮」を示す言葉です。この意味でホームレス支援は、物理的困窮との闘いであると同時に無縁との闘いでありました。たとえ「ハ



2001年新年炊き出しの様子。

ウスレス」を克服しても、「自立」が「孤立」に終わるなら問題の本質は依然残されたままです。「彼らにとって何が(衣食住などの物理的課題)必要か?」と共に「彼らにとって誰が(心配してくれる)必要か?」という問いは、支援者が常に心に置いておかねばならないことでした。

野宿者襲撃事件が語ること

今から十数年前、深夜に中学生らしき少年二人組が自転車ややって来て、寝ている野宿者を襲撃するという事件が頻発しました。当事者のおやじさ

んが語った言葉が今も心に残っています。「夜中の1時、2時に町を自転車でもウロウロしている中学生は、家があっても帰るところがない子どもたちではないだろうか。親からさえも心配されない子どもたちではないか。帰るところのない奴らの気持ち、誰からも心配されない奴らの気持ちは(ホームレスである)自分にはわかるがあ」。両者は、加害者と被害者という関係と同時に「ホームレス」という同じ十字架を背負わされています。

人と人との絆が分断される時代、中学生のホームレス、サラリーマンのホームレス、「主婦」のホームレス、ホームレスの老人が存在しています。住む家はある(ハウスレスではない)が、ホームレス(絆を喪失した)状態の人びとが多く存在しているのです。

「生産性」という価値観

「生産性のない人間が迫害や差別されるのは当然のことだと思ふ」。ホームレス支援機構のホームページに書き込まれた一文です。「生産性」とはいったい何でしょうか。投稿した方は「ホームレスは生産性が低い」迫害や差別を受けて当然」と言います。子どもたちによるホームレス襲撃事件は、この「生産性」に絡む事件であると思

います。襲撃の理由は様々です。ひとつに子ども自身がストレスを発散させているという面もありますが、大人社会そのものが持つ「生産性」の価値観が子どもたちに「迫害しても良い」という墨付きを与え、「悪気なく」襲撃させていることも事実です。さらにこの価値観は当然子ども自身にも向けられていますので、「生産性のない者は迫害される」という危機感を子ども自身が常に持っています。ある襲撃事件で逮捕された中学生は「社会のゴミを片付けただけ。褒められて当然」と語りました。ホームレス襲撃は、「ホームレスを排除したい」という大人社会の本音を見抜いた子どもたちが、「襲撃することで自分は社会の役に立っており、生産性がある」ということを自ら証明せんがために行った行為です。その意味で襲撃する子どもたち自身「誰かに認められたい。社会とつながっていたい」という叫び声をあげているのかも知れません。どんな理由であれ襲撃は許されるものではありません。しかし、この「叫び」と私たちは向かい合わねばならないと、ホームレス支援の現場で常に考えています。なぜなら、それは絆を失ったあらゆる人びと(ホームレスの叫びであるから)です。■

03

あっちこっち 雑学手帖 04

松田麻衣子 / まつだ・まいこ
APLA事務局



カンチル(豆腐)とワニ

イラスト: 上原祥子

出雲神話の一つ、因幡の白兔にはワニが出てくる。原文では「海の和邇」となっている。しかし鱈は川の生き物であるし、何より古代日本に鱈はいない。山陰地方では鮫やフカを「ワニ」ともいうが、元々は海の神やその使いのことを「和邇」と呼んでいたからだから和邇≠鱈、鮫と見るのが良さそうだ。

知恵のある陸の生物が水中の生物を騙して川や海を渡るという話は、東南アジアやインドにもある。例えばインドネシアには、洪水のため対岸へ渡れなくなったカンチル(豆腐)が「頭数を数える」とプアヤ(ワニ)を騙して呼び集め、その背を利用して川を渡ったという話がある。ここには領土拡大の意味も込められているらしいが、生活圏内にワニが生息

していることを思えばしっくり来る。おそらくこの形の話が海を渡って伝えられたのだろう。

そもそも、因幡の白兔は古事記の中の一エピソードに過ぎない。因幡のヤガミヒメをめぐって兄弟(八十神)にいじめられていたオホナムチの前に丸裸の兔が現れる。「ワニを騙して海を渡り、去り際嘲笑ったら衣服を剥かれ、終いには八十神の嘘によって身を尽く傷つけた」と嘆く兔に、オホナムチが正しい癒し方を教える。元の姿に戻った兔は「ヤガミヒメはあなたが得ることでしょう」といい、後に免神となる。なるほど、こう聞くと因幡の白兔はいわば神々の昇進試験の一つだったと分かる。さらに話が進むとオホナムチはオオクニヌシの名を得るのだが、王としての素質を試す話に異国の説話が素材として用いられ、数ある類話の中でも唯一騙したことを暴露して振り返りに遭う兔の話、『因幡の白兔』が成立したのかもしれない。

今や賢いカンチルはインドネシアの国産車になった。神の使いの和邇なんて元からレベルが高そうだし、痛い目を見た兔も果ては神様だ。あわれ騙されっ放しの異国の水中動物たちに、何かいいフォロワーはないのか。

01



堀田正彦の アジア食い倒れ 04

堀田正彦 / ほった・まさひこ
㈱オALTER・トレード・ジャパン代表取締役



イラスト: 保光美由紀

マレーシアの「鱈丸」と「四ゴロン」とカレー。マレーシアでもっとも魅力的な場所は「カーパーク」である。「カーパーク」とは読んで字の如し「駐車場」である。

イポーという町で、昼飯時に友人が「カーパークに行こう!」というので、「車に乗ってどこか素敵なレストランにでも連れて行ってくれるのか?」と思ったら、元駐車場を屋台にした場所に案内された。25店ほどの屋台がぐるりと広場を取り囲み、広場には椅子とテーブルが配置されている。真ん中に飲み物類と白いご飯だけを提供する「カーパーク」の所有者の店があり、その代金がいれば入場料代わりである。

それぞれの屋台は、すべて一品料理の屋台である。派手な炎を上げて勢いよく中華鍋を振り回しているの

は「渡り蟹のぶつ切り四川風炒め」の屋台。マレー料理のサテーを焼く屋台には、バナナの茎に差し込まれた大量のヤギ、鶏、牛肉の串が並ぶ。さらに、インド料理オンパレード、南インド、北インド、ベンガル、菜食、タンドリ・チキン、サモサ、チャパティ、プリー、とそれぞれ主張しながらうまく間隔を置いて配置されている。中華料理も、四川、北京、潮州、広東、揚州とすべての地域の料理が並ぶ。これにタイ料理まで参加してくる。一品が300円から500円である。天国である。

私の中で秀逸であると思うのが、「鱈丸」と「四ゴロン」とカレーである。中ぐらいの大ききの鱈丸を丸ごと素揚げして、それを秘伝のチリソースに漬け込み、水分がなくなるまで火にかけられる。真っ赤に仕上がった鱈に、タイムや香菜やミントの葉が振り掛けられ、皿に「四ゴロン」と置かれる。屋台の親父はタミール人の粋な伊達男で、別の一枚の皿を手に取り、大鍋に炊き上がった黄色のサフラン・ライスのふたを開けると、なべの周囲にそって皿を動かして、水平にライスをなで斬りに掬い取るのである。それを鱈の隣の隙間に盛り付けると「一丁上がり!」おいしいです。

04

じゃらん じゃらん アジア 04

村井吉敬 / むらい・よしのり
早稲田大学教授、APLA共同代表

おなじみエコシユリンプの育つ東ジャワの粗放養殖池の、もともとの主はミルクフィッシュ(インドネシア名バンテン、タガログ語名バンクス、和名サバヒ)だった。熱帯泥湿地で川が流れ込む海辺にはマングローブ林もある。そこを均して田んぼのような囲い池をつくる。乾季は塩田になるところもある。雨季にはミルクフィッシュの稚魚や稚エビが入ってくる。それが藻草や、そこにつくプランクトンを食べて自然に大きくなる。これが養殖池の起源だろう。

ミルクフィッシュは日本ではあまりなじみのない熱帯・亜熱帯の魚である。正確にはネズミギス目サバヒ一亜目サバヒ科サバヒ属に属する魚である(学名:Chanos chanos)。大きなものは1m以上になるというが、養殖池ではそんなに大きくしない。せいぜい30〜40cmくらいで出荷する。海水魚であるが、淡水でも育つ。白身だからミルクフィッシュの名前がついたのだろう。柔らかい白身で癖のない味が好まれている。とくに台湾では国の英雄鄭成功にちなんで「国姓魚」(麻虱目ともいふ)と呼ばれ、朝がゆに用いられるなど大衆魚として親しまれてきた。フィリピンでも、国の魚と呼ばれるほどよく食べられている。もちろんインドネシアのジ

ヤワ島やスラウエシ島でもよく食べられている。

この魚に初めて出会ったのは南スラウエシの養殖池であった。池の管理人のラトンコさんの池ではたくさんのミルクフィッシュが勢いよく泳いでいた。それを獲って串焼きにしてくれた。その後見たほとんどの粗放養殖池でミルクフィッシュが池の主役だということを確認した。この魚が勢いよく泳ぐことで酸素が補給され、エビの生育にもよいということを教えてくださいました。東ジャワ養殖池主の故ハジ・アムナンさんで、(株)オルター・トレード・ジャパンがエビを買い付け始めた初期にはアムナンさんの池のブラックタイガーがたくさん入っていた。有機エビの背後にはミルクフィッシュがいるのである。



養殖池畔にあがったミルクフィッシュ。

02

むらを歩く ④

大野和興 / おおの・かずおき
農業ジャーナリスト、本誌編集長

幻のサツマイモがよみがえる ちぢみ太白イモで老百姓

太白イモというサツマイモがある。戦前、埼玉・秩父地方から群馬にかけての山間部で作られていた。皮はやや薄い赤紫色をしていて、切ると中は真っ白。ねっとり甘く、イモ好きには堪えられないと定評があった。酒好きのおやじでさえ、「このイモの天ぷらは抜群だ」ところけるような目付きで、真顔でいうほどだ。そのイモも、ついこの間まで「幻のイモ」だった。第二次大戦中から戦後にかけての食糧難の時代に消えていったのだ。理由はこのイモの収量が低かったことにある。戦時中、まずはお腹を満たそうと奨励されたサツマイモは、とにかくでかくてまじかかった。その代わりたくさんとした。みんなが腹をすかせているときに、収量が低いイモを作ったりしたら、それこそ非国民と名指して非難された時代である。

今年82歳になった秩父市の飯島久さんはこの太白イモをずっと守り続けてきた。

「頭のいい人はこんなイモは捨てて、金になるものに切りかえていった。自分はうまいイモだから、絶やしてはもったいないと作り続けただけ。」

サツマイモは寒さに弱い。摂氏10度以下に下がると低温障害を起こし、

黒く変色したり腐ったりする。だから農家は、家の中に地下貯蔵庫を作ったり、畑に深いイモ穴を掘ったり、南向きの傾斜面にむらをつくったりと、工夫を凝らして冬を過ごす。特に種イモの保存には神経を使う。飯島さんは家の中にイモをいれ、毛布や布団をかけて守った。

そのイモがいま脚光を浴びている。飯島さんの話が次第に広がり、「もう一度太白を食べたい」という注文が殺到しているのだ。飯島さんは周辺に呼びかけて「ちぢみ太白サツマイモ生産組合」を06年に立ち上げた。地元の農業高校で太白イモを使った調理実習が行われ、2年生40名が太白サツマイモごはん、とろりりクリームスープ、まるいもコロッケ、いもいもスイーツの4品を完成させた。



太白イモ。

今回のお題

ゲランドの塩

レポーター
山下万里子 / やました・まりこ
(株)オルター・トレード・ジャパン 事業部課長



ところで、このゲランドの塩、使っている方はもうご存知だと思いますが、たまたましよっぱいだけの塩とは違い、なんともいえないまろやかな味わいは一度口にすると思われないのです。料理、パン作りにおいて我が家の塩はもうすべてゲランドの塩に切り替わりました。フランスでは肉や魚の塩釜焼きなどで大量に使われるレシピもあるようですが、日本では調味料は今や減塩ブーム、「いい塩梅」という言葉があるくらいですから使ってもほんのちよっと。この「ほんのちよっと」で、素材の良さをどうすればわかってもらえるか、ということ。今回はいま巷でも人気の「塩」生キャラメルをつくってみることにし

ました。
塩キャラメル作り挑戦!
甘いものには目がありませんが、生キャラメル、とやらを口にしたのは実はつい最近。口のなかで勝手に溶けてゆく魅惑の食感に思わずうっとり。原材料をみてみると意外にシンプルな材料のみで作られていることがわかり、いざ挑戦。材料はマスコバド糖、ゲランドの塩(細粒塩、粗塩)、生クリームだけ。マスコバド糖がもともと果糖なので、どこまで煮詰めたいのかタイミングがよくわからないし、塩の加減も味見をしようにも沸々と煮えたるキャラメルソースで舌を火傷しそうになりな

ら、なんとかトッピングに粗塩をちりばめて完成。マスコバド糖のやさしい甘さと濃厚な生クリームのコク、そしてなんととっても、ちりばめた粗塩のうまみのある塩味とじやりとした舌触りが結構マッチ。折角つくったので職場に持参し同僚にも試食してもらいました。煮詰める時間が短くて、包み紙にひつついて離れない塩生キャラメルを歯でシガシガしながら、「おいしい!」と言ってくれました。そんな姿をながめつつ、やっぱりゲランドの塩の良さを再認識しつつ、お菓子作りの腕を磨くこと、そしてこの美味しい塩を使った加工品を作るぞ!と俄然やる気が出てきた塩担当でありました。■

今 一回ご紹介するのは(株)オルター・トレード・ジャパン(以下A.T.J)で取り扱う、フランス西海岸ブルターニュ地方で古くから繁栄してきたゲランド塩田で採られた「ゲランドの塩」です。「A.T.J」がフランスの塩?と思われる方の中にはいらっしゃるかもしれませんが、ゲランドの塩は、古くは紀元前9世紀以前から続く伝統的な製法で作

られている塩です。その過程では戦争や新産地の出現で塩田が廃れたり、近年のリゾート開発の波に飲み込まれそうになりながらも綿々と塩を守り続けている生産者がフランスにいます。そんなゲランドの塩を通じて反グローバリゼーション、反GMO(遺伝子組み換え)を掲げる市民運動と日本の消費者の交流と連帯を掲げて始まった、というのがA.T.Jで取り扱うゲランドの塩です。

ほんのちよっとでおいしい塩

ゲランドの塩を使った塩キャラメル

意外に簡単で贅沢な味わい。温めた牛乳に溶かし入れてキャラメル・ラテにもどうぞ。

- 【材料】**
●マスコバド糖: 70g ●水: 大さじ2杯
●ゲランドの塩(塩=生地に溶かす用、粗塩=トッピング用): お好み調整
●生クリーム: 100cc

- 【作り方】**
① 鍋に水と砂糖を入れて強火にかける。
② ふつふつと煮えてきたら、一旦火をとめて生クリームを少し入れてよく混ぜる。このとき急激に入れるとキャラメルソースが飛び散るので要注意。
③ なじんだら、弱火にかけて残りの生クリームを少しずつ入れてよくかき混ぜる。
④ とうろくにして15~20分くらい煮詰める。時々かき混ぜる。
⑤ クッキングシートを敷いたバットに流し入れ、あら熱をとってから冷蔵庫で1時間ほど冷やす。
⑥ クッキングシートからはがして、好きなサイズにカットして召し上がれ。



ゲランドの塩製品と不恰好な塩生キャラメルたち



- 1 — ☒みかん畑☒
農業で食べていきたいと思っているけれど、土地も機械もお金もない私はもらえるものは何でももらいます。その日は草刈機をくれるっていうから行ったのに気がついたらハウスの上でビニールの張り替えに加わっていました。そのハウスの前から撮った一枚。
- 2 — ☒石橋☒
私の家から走って30秒で鹿児島県、つまりは県境に住んでいます。その県境の川にかかる石橋です。川の名前は境川、橋の名前は境の橋、そのまんま。明治の初めに肥後の石工によって掛けられた橋だそうです。
- 3 — ☒夕日☒
不知火の海の向こうに横たわる長島のそのまた向こうに沈む夕日。水俣はリアス式海岸で起伏が重なります。だからみかん山はたいい海を見下ろす格好になります。夕日を背にした天草の島々も、夕日に当たるみかん山もただただ綺麗なのです。
- 4 — ☒冷水☒
冷たい水と書いて「ひやすじ」と読みます。自然林に守られた湧水は農業用水として大切に使われています。学校から帰る途中いつもここで水をすくって飲んでいました。私の習字の先生はここで白狐を見たそうです。ほんとにかよ。

(2009年撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!

【事務局だより】

編集後記

農業とは食料を生産することだけではない。人が生きてきた歴史であり、その歴史を貫く文化であり、なにより人の生き方なのということが、パレスチナ農業を考えることでよくわかった。日本でもいま、人びとが生きてきた証が、山や里から急速に消えている。置かれた状況こそ異なるが、「百姓であること自体がたたかい」である、そんなたたかいが全世界でうごめいている。(大野)

今、外では桜の花が咲ききり、そろそろ散ろうとしている。やっぱり桜が咲くと春が来た!と実感し、何もないのに心が喜んでいる。今号の特集で掲載した内容に、パレスチナでは2月にアーモンドの花が咲き乱れると書いてあった。アーモンドの花は桜の花に似ている。花を愛でる人の心は万国共通だ。(吉澤)

味のあるイラストでコラムに花を添えてくださった上原さんとは、ハリーナの表紙を飾る布探しの中で出会った。今は一緒に茶道を習ってもある。これまでどれだけ雑に生きてきたか、どれだけのことをなおざりにしてきたかを思い知る日々。小さなサインを放つたかかしにしない生き方を心がけたい。(松田)

ハリーナ HALINA

2009年春号 vol.02-no.04
2009年5月1日発行

【編集長】
大野和興

【編集者】
吉澤真満子、松田麻衣子

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぶら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/04/04_halina.html

事務局の動き(2009年2月～4月)	
2月 2日	パルシステム・ドゥコープ平和募金贈呈式に吉澤が参加しました。
2月 4日	東京学芸大学附属高等学校社会見学実習においてAPLA / あぶらの活動について吉澤が授業を行いました。
2月 7日	APLA理事会開催
2月 23日	～未来をひらく後継者・若者対象～「BM基礎セミナー」第1回に吉澤が参加しました。
3月 4日	㈱オルター・トレード・ジャパン (ATJ) と協議会を開催しました。
3月 16日	生活クラブッキングスタジオオベルのイベントに吉澤が参加しました。
3月 25日	パルシステム神奈川ゆめコープのイベント「平和交流のつとめ「ハートカフェ」」にATJと一緒に参加しました。
4月 4日～5日	『地球的課題の実験村ミニシンポと年次寄り合い(三里塚)』に参加し、APLAとして村民になりました。
4月 13日	東ティモールを訪問し、来年度の計画の打ち合わせを行いました(津留・吉澤)。
4月 15日	インドネシア・スラバヤのATINA社を訪れ、来年度の計画の打ち合わせを行いました(津留・吉澤)。
4月 21日	宝仙学園中学高等学校の総合学習の時間に吉澤が授業を行いました。
4月 25日	APLA理事会・評議員会開催
2月 20日 3月 19日 4月 16日	APLA民衆交易・フェアトレード研究会を開催しました。

事務局からお知らせ

09年総会は5月16日(土)開催です。

正会員の方はご出席よろしくお願ひします。
時間:10:30～12:30(受付10:00～) 場所:浜松町・海員会館
また、5月17日には千葉県三里塚にてAPLAフォーラムを開催、フィリピンよりゲストを招きシンポジウムを行います。ぜひご参加ください。

第一回 APLA/あぶらフォーラム
“農を軸にした地域づくり・若者が主役になろう”

APLA / あぶら がめざす“農を軸にした地域づくり”。それには地域を担う次世代の若者たちが、どうやって参加していくかが重要な課題です。第一回APLA / あぶら フォーラムのキーワードは“若者”。農業と地域づくりの今後について語り合ひましょう!

- 日 時 2009年5月17日(日) 13:30～15:30(受付13:00～)
- 場 所 千葉県成田市(会場については、後日改めてお知らせします)
- 参加費 会員:無料、一般:500円
- フォーラムスピーカー
アルフレッド・ボティオス
NBA (APLA / あぶらがパートナーとするネグロス島の農民グループ) アドバイザー。
グレッグ・ラシガン
農村開発の協同組合 (CORDEV) 役員。地元の生産者組合が生産している作物のマーケティング、地域開発サポートを中心に進めている。
その他、日本の新規就農者も参加予定。

APLAでは会員さんへメールマガジンを配信しています。
APLA会員限定のメールリストを不定期に流しています。まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡下さい。info@apla.jp)

From Korea 【韓国より】
韓国ともパートナーシップを築いています。(ドゥレ生協とAPNet)



ネグロス島の生産者を訪問。

ドゥレ生協(Dore consumer's cooperative)は、1997年に設立された生活協同組合です。(1)食糧自給率を高め、生態系を守る(2)生活習慣の変革により、現在の国際市場のあり方に対抗する(3)組合員参加により、透明性の高い運営を行う(4)地域社会のために多様な事業を行う(5)地域社会

との強力な関係性を構築する、というのが活動の柱です。2003年、組合員の要望により、フィリピンのマスコバド糖生産者との関係をスタートさせました。これまでにドゥレ生協が築いてきた国内の生産者と消費者との関係性の枠を越え、民衆交易や新たな交流・協力関係構築に踏み出したのです。それにあたり、理事数人がフィリピン・ネグロス島を訪問し、その体験を組合員と共有しました。そして、2004年6月に韓国に初めてのマスコバド糖が運ばれてきました。この輸入事業を担う団体として、APNet (Alternative People's Network for Peace and Life) を設立し、現在は、マスコバド糖の他に、パレスチナのオリーブオイル、そしてエタドル、ペルー、東ティモールのコーヒーを取り扱っ

From Palestine 【パレスチナより】

オリーブオイル出荷団体 UAWCのご紹介

1980年代初期から、パレスチナの土地や水は、イスラエルの占領政策によって没収されてきました。それにより直接的な被害を受けたのは農民です。

UAWC (パレスチナ農業開発委員会) は、農民が直面した社会経済状況に対応するため、1986年に非営利組織として設立されました。そのため、当初UAWCの最大の目標は、パレスチナの農業インフラを破壊し、農業を周縁化していくイスラエルの占領政策と闘うことでした。その活動を担っていたのはボ



オリーブの木を植えやすいように土地を造成している様子。

「地域の風土にあったものを生産している生産者を支援する」「環境を保護し、生産者と消費者が互いに信頼しあえる商品を生み出す」「貿易を通じて、生産者と消費者の互助関係を創り出す」それが私た

ちの活動です。そして、その活動を通じて、世界中の誰もが平和に暮らせる社会、互いに助け合える社会を目指しています。新しい社会、新しい文化の創出が私たちのゴールです! (朴鏡珍 APNet事務局 / 抄訳:事務局野川)

ランティアアのメンバーでしたが、その後、活動を強化するために、ヨルダン川西岸地区とガザ地区に農業委員会を設立したという経緯があります。現在UAWCは、ラマラとガザに本部事務所、ジェニン、トゥルカレム、ヘブロンに支部事務所を置いて、各地で様々な事業を行っています。

- 具体的なには、農地開拓、オリーブオイルの品質向上、国際的なマーケティングなどがあります。また、各地で協同組合の設立を手助けし、農業委員会を通じて農民を組織化しています。活動の根底にある目標として、
- 農業による利益を向上させる
- あらゆる政策や自然災害から、土地、水の供給に関する農民の権利を保護する
- 失業や貧困をなくし、食糧安全を高める
- 地域の女性のエンパワメントに貢献する
- どのようなことを掲げているか
- 日本の皆さんがパレスチナの農民に常に寄り添ってくださることに深く感謝します。パレスチナの人びとは、皆さんの連帯と思いやりのおかげで、よりよい未来を夢みて、希望をもって生きることができているとお伝えたいと思います。(カレド・ヒドゥミー/パレスチナ農業開発委員会代表(UAWC) / 抄訳:事務局野川)